

「一番むづかしかった」問い ——海村調査「採集手帖」における不記載項目——

川 田 牧 人

1. はじめに

筆者は先に、成城大学民俗学研究所に保蔵されている『郷土生活研究採集手帖』いわゆる山村調査のフィールドノートを資料として、そこにどのような記録が記され、何が記載されなかったのかについて小論にまとめた [川田 2025]。保存されている68冊の採集手帖にある百項目に関する記載を確認して、項目ごとに不記載率を算出した結果、最も不記載率の高かった上位3項目は、

項目37「笑わない人がありますか」(58.53%)

項目100「仕合わせのよい人又は家の話があるなら承りたし」
(48.52%)

項目28「村の公と私とはどんな場合に明白に現れますか」
(42.64%)

四
七
八

「一番むづかしかった」問い

であった。これは逆に不記載率の低い上位3項目、

項目80「山の神はどんな所にあつて、何時どんな祭りをしますか」(0%)

項目9「どうしても外から買わねばならぬものは何々ですか」(1.47%)

項目20「村の人等が互に共同して作業するのはどんな場合ですか」(1.47%)

と比べるとその不記載率の差異が顕著にあらわれることが明らかとなった。

「採集手帖」の記載実態にこのような顕著な差異が見いだされることは、かねてより一部で指摘されていたが、あらためて採集手帖の百項目全ページの記載状況を調査してその実態を数量的に把握し、その結果から、個人に対する評価を含む質問や個別のケースについての語りを求める質問が回答を得にくいこと、笑いというきわめて創造的かつ集団より特定個人において顕現するという文化的表現を捉えにくかったことなどについて考察を加えた。ただし、フィールドワークにおける「不記載」の根拠に一足飛びに飛びつく前に、この山村調査がその後、海村調査に引き継がれた経緯を検討しておくべきだと思ったのが、本稿の執筆動機である。

海村調査について検討した先行研究は、山村調査に比べるとさほど多くはない。それは山村調査が本邦初の組織的な民俗学的共同調査であったのに対し海村調査は二番煎じの感が拭えず、

また計画途上で日中戦争の激化などにより中断してしまったという事情が関連しているかもしれない。ただその中でも、倉田一郎が新潟県佐渡郡内海府村での調査を記した採集手帖（いわゆる「倉田手帖」）に関しては、多くの研究者が高い関心を示してきた。それはこの「倉田手帖」をもとに、柳田国男が『北小浦民俗誌』を著しており、両者の記述に関する子細な検討にもとづいて、たとえば篠原徹は柳田が「民俗学的歴史像が権力や政治と無縁の如く人のいい老人ばかりで構成されている印象を与える」ような、いわゆる「世に遠い一つの小浦」を夢想的に描き出したことを批判している〔篠原 1990：71〕。この論文においても百項目調査のうち採集されなかったものへの着目が見られるが、それをさらに詳細に検討したのが中野泰である。中野はまた「倉田手帖」と『北小浦民俗誌』の両者にあらわれる民俗語彙の比較を長大な比較表にまとめ、そこから「柳田が利用した語彙は、彼の体系的な枠組みの中へ位置づけられることで、適当な意味を持つ器としての役割を果たしていた」〔中野 2001：348-349〕という結論を引き出している。また小野博史は、フィールドワーカーの問題意識の違いによって異なった民俗誌が書かれることを前提として、「倉田手帖」と『北小浦民俗誌』が異なった様相を見せることから、倉田一郎と柳田国男の問題意識が必ずしも一致していなかった可能性を示唆する。そこから現代のフィールドワークへの教訓として、項目設定の難点と、情報共有の手段の難点の二点をあげている。本稿の関心

「一番むづかしかった」問い

から興味深いのは、倉田一郎の調査の現場での記述の仕方を再構成している点である。「調査の際にはノートに書き記し、調査を終了した後に『採集手帖』の各質問に答える形で調査の際のノートから書き改めたものと考えられるから、『採集手帖』の質問項目をそのまま質問したのか否かは明らかではない」[小野 2002: 288] という指摘からは、実際の調査にあつて採集手帖に記載のある調査項目そのままが現場で質問されなかった可能性を検討する余地を生じさせる。

このように、「倉田手帖」をめぐるさまざまな検討からは、百項目調査における不記載項目が生じた事情や経緯へと問題関心はひろがっていく。もっともこれは「倉田手帖」という、それに依拠して柳田国男が民俗誌を著したとされる一冊の採集手帖にまつわる個別事情とも解しうる。海村調査の採集手帖すべて、あるいは海村調査全体を見通した検討に関しては、成城大学民俗学研究所による離島調査をも含めた追跡調査の成果においてまとめられている [田中・小島 (編) 2002]。そのなかで、海村調査の全般的な特徴について以下のように指摘されている。

- ・「山村調査」用のが、一般にムラ生活を問う意識が強く農林業など生産・生業への配慮が相対的に弱かったのに比べ、「海村調査」用のは、漁撈活動や漁撈の儀礼、漁の神にも多くの関心が向けられている。その結果として当然「手帖」への報告事例も多くなっている。

- ・ 通過儀礼に関する問題意識が充実している。
- ・ 隠居や主婦権の問題が新たに浮上してきた。
- ・ 女性について、労働上の役割のみでなく宗教上の役割にも注目しようとしている。[田中 2002 : 17]

採集手帖への記載実態を反映した総括として以上の特徴が指摘されたことを考えると、採集手帖に何が記載され、どのような項目が未記載のままであったのかという問題意識は、本稿でにわかに立ち上がったものというより、採集手帖を考えるときには避けて通れぬ重要事項であったことが確認できる。

そもそも採集手帖における不記載の問題は、実際に山村調査、海村調査に参加した調査者による座談会でも明確に指摘されている。たとえば山村調査をめぐる座談会の中で、田中宣一は次のように指摘している。「先ほど、村人の心意を探るということをおっしゃいましたが、一〇〇の質問項目の中の、「特に仲の良い村、仲の悪い村というのがありますか」という質問とか、「どういう若い人が人から褒められますか」とか、「村の公と私とを表わす言葉がありますか」等々の質問は、村人の倫理観を探る意味で意義のある質問だと私は思うのですが。……(中略)……しかし先生方のおまとめになりました『採集手帖』の内容を拝見しますとですね……(中略)……何か、こう、簡単にしか書かれていないか、その質問に対する答の部分だけ、空白のままになっているのが多いようですが(笑)、これに関敬吾が答えて、

「一番むづかしかった」問い

「うまく聞けないわけなんです。人の心に立入って他人の評価、場合によると他人の悪口を語らせることにもなるから、むづかしかった」と述べている〔民俗学研究所（編）1986：248-249〕。この当時から「採集手帖」に未記載のページがあることは注目されていたことがわかる⁽¹⁾。

より直接的には、海村調査を顧みる座談会で以下のような発言を確認することもできる。

「大間知 先生ですね。僕等相談したのがなかなか出来ないで居たら先生が紙をとってざっと百ばかり作って下さってびっくりしました。最初の時は抽象的なむづかしいものが多く、二年目から具体的にしましたね。

柳田 良い娘とか、良い若い者はどういう人かという問題はききたかったが、むづかしたね〔ママ〕。答えられたのが少なかった。

関 「公と私」というのはわかりませんでしたね。

瀬川 一番むづかしかったは「笑い」でした〔ママ〕。「笑わない人がいますか」というのは採集にとっても困りました。」〔柳田ほか 1949：26〕

「笑い」は「一番むづかしかった」問いであったことが明かされており、この引用をもって採集手帖の不記載項目の実態を明らかにするという本稿の目的も半ばはすでに達せられたような

ものである。しかしそこにとどまることなく、そもそも調査において「項目」が策定されることにはどんな意味があるのか、フィールドのある特定の現実を浮かび上がらせるのに「項目」が用いられるという認識の仕方とはいかなるものであったのかなど、山村・海村調査の採集手帖から考えるべきことの一角に光をあてることを本稿ではめざしたい。

2. 海村調査のあらまし

この節では海村調査の概要をまとめ、とりわけ調査地や調査項目について不記載の実態を検討する前段階の作業として概観しておきたい。

あらためて述べるならば、ここに海村調査と略して示しているのは、柳田国男が指導する郷土生活研究所が日本学術振興会の資金的補助を受け、1937（昭和12）年5月より1939（昭和14）年4月にかけて実施された「離島及び沿岸諸村に於ける郷党生活の調査（資料蒐集並にその結果の出版）」のことである。当初3ヶ年の計画であったこのプロジェクトが約2年で中断したのは、研究実施初年度が奇しくも日中戦争勃発と同年であることからわかるとおり戦時期と重なっていたからである。研究資金が打ち切られたため3年目の調査実施ができなかった上に、その調査成果の刊行はアジア太平洋戦争終結後の1949（昭和24）年まで引き延ばされることとなった。このことは、海村調査に先

「一番むづかしかった」問い

【表1】「海村調査」の調査対象地

昭和12年度			
番号	対 象 地	担当者	採集手帖 保蔵番号
1	宮城県本吉郡大島村	守隨一	4
2	岩手県気仙郡綾里、越喜來、吉濱村	守隨一	4
3	東京府三宅島各村	最上孝敬	9
4	千葉県安房郡富崎村	瀬川清子	6
5	新潟県佐渡郡内海府村	倉田一郎	12
6	石川県鳳至郡七浦村	大藤時彦	13
7	三重県北牟婁郡須賀利村	牧田茂	18
8	千葉県安房郡千倉町忽戸、平館、千倉	瀬川清子	7
9	千葉県安房郡長尾村	瀬川清子	8
昭和13年度			
10	岩手県下閉伊郡普代村	櫻田勝徳	2
〃	岩手県下閉伊郡重茂村	櫻田勝徳	3
11	東京府八丈島五ヶ村	大間知篤三	10
12	静岡県賀茂郡南崎村	瀬川清子	15
13	和歌山県和歌山市雑賀崎 附 和歌山県西牟婁郡串本町、東牟婁郡大島 村檜野、同郡太地町	橋浦泰雄	19
14	岩手県九戸郡宇部村	大島正隆	1
15	鳥根県穩地郡都萬村	大島正隆	22
16	愛媛県越智郡宮窪村（大島）（1）	倉田一郎	24
〃	愛媛県越智郡宮窪村（大島）（2）	倉田一郎	25
17	秋田県南秋田郡北浦町・戸賀町	牧田茂	
18	愛知県知多郡日間賀島村 附 愛知県幡豆郡佐久島村	瀬川清子	16

19	高知県幡多郡沖ノ島村・鶴來島 附 沖島村弘瀬・母島	牧田茂	29
20	大分県北海部郡海邊村中津浦・大濱	瀬川清子	31
21	徳島県海部郡阿部村	瀬川清子	28
昭和14年度			
22	新潟県西蒲原郡閭瀬村	橋浦泰雄	11
23	香川県仲多度郡高見島村	武田明	27
24	広島県豊田郡幸崎町字能地	瀬川清子	23
25	鳥根県簸川郡北濱村 附 那賀郡川波村波子	瀬川清子	21
26	大分県北海部郡佐賀關・一尺屋村	瀬川清子	30
27	愛媛県伊豫郡松前町	瀬川清子	26
28	京都府竹野郡濱詰村・下宇川村 附 與謝郡伊根、府中村、加佐郡東大浦村	瀬川清子	20
29	福井県坂井郡雄島町・北潟村	瀬川清子	14
30	福井県丹生郡國見村・四ヶ浦村・城崎村	瀬川清子	14
番号なし（採集手帖あり）			
	福島県石城郡豊間村	山口彌一郎	5
	沖縄県宮古郡平良町池間	森田勇勝	32
手帖なし（調査報告あり or 『海村生活の研究』に記載あり。秋田県南秋田郡北浦町・戸賀町以外）			
	京都府熊野郡湊村	平山敏治郎	
	山口県阿武郡見島村	瀬川清子	
	大分県南海部郡東中浦村	瀬川清子	

「一番むづかしかった」問い

立つ山村調査（日本僻陬諸村における郷党生活の資料蒐集調査）が1934（昭和9）年から1936（昭和11）年の3ヶ年にわたって実施された後、その成果論集である『山村生活の研究』が研究期間終了直後の1937年6月に刊行されたことを考えると、大いなるスローペースであったといわざるを得ない。

そのこともあって、海村調査の成果出版物である『海村生活の研究』の冒頭には、「待ちに待った海村報告の一部が、やっと世に出るようになった」⁽²⁾ [柳田 1949 : 1] と記されている。この海村調査の総括ともいえる成果出版物の巻末には「経過報告」とともに、「調査地一覧」と「海村生活調査項目」が掲載されている。それをもとに調査地について作成したのが【表1】である。

この表の昭和14年度30番までの記載が『海村生活の研究』に記載されているが、さらに本稿の調査で対象とした成城大学民俗学研究所が保蔵する採集手帖として残っているものは「番号なし（採集手帖あり）」として、また採集手帖はないが調査地と調査者がわかるものは「手帖なし（調査報告あり or 『海村生活の研究』に記載あり。秋田県南秋田郡北浦町・戸賀町以外）」として表に組み入れた [cf. 田中・小島（編）2002 : 15]。さらに、成城大学民俗学研究所における保蔵番号欄を右端に設け、対応関係がわかるようにした。本稿では以降の情報整理にこの保蔵番号のほうを使用する⁽³⁾。

調査地のほかに重要なのは調査項目である。山村調査を踏襲

して、海村調査でも100の調査項目が用意されており、採集手帖において見開き2ページの記入欄が設けられるという基本構成は同じであるが、手帖自体の目次構成が若干変わっているので、まずその体裁について述べよう。山村調査の採集手帖は、タイトル・ページをめくると「趣意書」、「郷土生活研究所同人」「採集地・採集者・話者」の記入用ページ、そして「採集上の注意」と続いたあと調査項目ページとなっていた。昭和10年版では新たに「索引」の見開きページが「郷土生活研究所同人」と「採集地・採集者・話者」の間に挿入されたり、昭和11年版では、「郷土生活研究所同人」のページが割愛されたりといった修正がほどこされたが、海村調査の場合は、「採集手帖（沿岸地方用）」のタイトル・ページのあとに「緒言」、「郷土生活研究所同人」「採集上の注意」「採集地・採集者・話者」の記入用ページ、「目次」（百項目の一覧）がつづき、その次のページから項目1以降順次、調査項目ページとなり1項目見開き2ページずつの記入用スペースが設けられている。

山村調査の採集手帖との大きな違いを3点指摘する。まずは採集手帖全体の構成として、100の項目について見開きページが終わった最後に約70ページの白紙ページが設けられたという点である。これは離島調査の際の完全自由記述式の採集手帖のスタイルとの関連もあるので、後にくわしく検討したい。ここでは調査項目そのものの提示の仕方として、ページ割付の変更が指摘できる。山村の手帖では見開きの左側に項目番号が印刷さ

「一番むづかしかった」問い

れ、2ページにわたって記載するときにはページをめくってその裏側のページに書き込むという体裁となっていた。これは先の論文でも指摘したとおり、切り離すと一項目一枚の調査カードとしても利用できる便宜を見込んでのことであった。ところが海村の手帖では見開きの右側に項目番号が印刷されており、一つの項目に関する記載が一目瞭然となる利点があるいっぽうで、上記のように調査カードとしては切り離せなくなってしまっている。山村調査の時に項目ごとに分類するなど切り離して利用することが実際なかったことをふまえ、それなら手帖として見開き一項目の体裁をとったほうが利用しやすいという判断が働いたのかもしれない。

そして第3点として、山村の手帖は昭和9年版、10年版、11年版と毎年改訂版が作成されたが、海村の手帖は奥付に昭和12年11月25日発行とある一版のみで、32冊すべてがこの版を用いている。海村調査にあっては山村調査のように毎年の調査項目の入れ替えなどがなく、約2年の調査期間、同じ項目番号で百項目が構成されていたことになる。

したがって、先の論文で難渋したような3年間の項目の対応関係の整理などは本稿においては不要となるのだが、いっぽうで、山村調査の項目との対応関係は確認しておきたい。どの項目が山村調査から引き継がれており、どの項目は海村ではボツになったかを知っておく必要があるからである。それについては【表2】にまとめた。

【表2】海村調査項目の山村調査項目との対応

番号	項目	山村 S11年版項目との対応	番号	項目	山村 S11年版項目との対応	
1	村の起り	← 1	51	同齡習俗	(通過儀礼関係)	
2	功労者	← 2	52	枕飯・分れ飯・香奠	(通過儀礼関係)	
3	大事件	← 3	53	死忌	←64	
4	村の盛衰	← 4	54	墓の種類	←部分的に66、67	
5	家の盛衰	← 5	55	先祖祭り	←68	
6	減んだ職業・夜業	←6、44	56	小屋・屋敷神	←70	
7	古い漁法	(海村に固有の調査項目)	57	間取り・イロリ	←部分的に59	
8	漁撈組の組織		58	家の出入り口	←部分的に60、62、63	
9	網子舟子の契約法		59	仕事の服装	←58	
10	漁撈仲間の役割		60	晴の服装	←57	
11	網株・舟株		61	普通食物	←部分的に51	
12	漁場定め		62	特殊食物	←52	
13	口開け		63	食物贈答	←55	
14	漁獲物分配		64	初漁祝	(海村に固有の調査項目)	
15	入漁者		65	大漁祝		
16	他村からの雇人		66	舟造り・舟下し		
17	定住の手続き		67	舟の種類		
18	仲良い村・悪い村		68	操舟作法		
19	売り出した物		←9の逆?	69	信号	
20	買い物物の場所		←10、11	70	酒宴の席順	←54
21	運搬方法			71	正月祝	←部分的に61
22	文化をもたらす者	←12	72	盆行事	←65	
23	出稼ぎ・遠方出漁	←14、15	73	氏神参りの帰村	←79	
24	旅と送迎	←部分的に55	74	神供と頭屋	←76	
25	村内の組		75	神社と旧家	←77	
26	隣家交際		76	宮座	←78	
27	講・日待	←18	77	神に祀られた人	←81	
28	ユイ・モヤイ	←20	78	漁の神・海の神	←80変形?	
29	手伝い・合力	←21	79	船霊	←80変形?	
30	災難時の互助	←22	80	漂着神	←80変形?	
31	村制裁		81	流れ仏	(海村に固有の調査項目)	
32	村の公と私	←28	82	祭前の慎しみ	←74、75	
33	漁師の格式	←29	83	動植物禁忌	←部分的に71	
34	占有の標識	←30	84	船上禁忌・沖言葉	(海村に固有の調査項目)	
35	相続	←31	85	一般禁忌	←73	
36	隠居と分家	(隠居・主婦権関係)	86	祟る場所	←84	
37	同族交際・同族神	←34、69	87	祭具の棄て場所		
38	仮の親子	←32	88	神罰・通り神	←86	
39	異常人物	←36	89	神事と女性	(女性の宗教的役割関係)	
40	笑い	←37	90	夢のお告・前兆	←91	
41	成年式	(通過儀礼関係)	91	卜占	←92	
42	若者組・宿	←39	92	妖怪変化	←89、90	
43	娘仲間・宿	←43	93	病不幸の呪願	←93	
44	嫁入り・初婿入り	(通過儀礼関係)	94	祈願の唱え言	←94	
45	遠方縁組み	←46	95	神仏の助け	←87	
46	産屋・産の忌み	←41?	96	共同祈願	←95	
47	初宮詣・幼児葬送	(通過儀礼関係)	97	道切り	←96	
48	子供組	←40内容変更	98	淨めの塩		
49	主婦権・女の私財	(隠居・主婦権関係)	99	死期の子知	←98	
50	年祝い	(通過儀礼関係)	100	仕合わせな家	←99、100	

「一番むづかしかった」問い

この表は調査項目のタイトルだけの不十分なものであるが、各調査内容まで掲載すると煩雑で見にくくなるため割愛した。なお、山村調査の項目と海村調査の項目の対比については前節でも指摘したように、山村と海村のそれぞれの生業を反映させた項目がみられること、トピックとして通過儀礼、隠居や主婦権の問題、女性の労働上の役割ならびに宗教上の役割などへ新たに焦点があてられたことなどが指摘されている [田中・小島(編) 2002]。山村調査の項目にみられなかったものでこの指摘にもとづく海村調査の項目の特徴を、【表2】には「海村固有の項目」、「通過儀礼関係」、「隠居・主婦関係」、「女性の宗教的役割関係」と注をつけて示してあり、合計26項目、約四分の一の項目が海村調査において新たに組み込まれたことが読み取れる。

さらに、先の論文では100の項目の不記載率を算出して、高い順、低い順のランキングを示したが、それらの項目が海村調査においては項目として組み入れられたのか、採用されなかったのか、という対応もみておく。不記載率というものが調査項目作成にあたってどの程度影響を受けるのかを考えるため、【表3】を作成した。

まず不記載率が低い、すなわち回答率が高かった10項目をみると、何らかの形ですべて海村調査項目に取り入れられている。もちろん山村という環境文化的条件を海村へと翻訳するような改変は必要であり、一字一句違わぬ調査項目のまま残ったわけではない。たとえば山村項目番号80「山の神」は、海村では78

【表3】 不記載率が高い／低い項目の海村調査項目へのシフト

順位	項目番号	不記載率(%)	山村調査項目における不記載率が高い項目	海村調査項目へのシフト
1位	37	58.53	笑わない人がいますか。	海村項目40にはほぼそのまま残る。
2位	100	48.52	仕合わせのよい人又は家の話があるなら承りたし。	海村でも最終の項目100として位置も同じのまま残る。
3位	28	42.64	村の公と私とはどんな場合に明白に現われますか。	海村項目32にはほぼそのまま残る。
4位	82	39.70	若い人たちの中に神信心の深い人がありませんか。	海村項目からは消える。
5位	87	35.78	氏神様、先祖様、屋敷神の力で助けられたという話がありますか。	海村項目95に「神仏の助け」として残る。
6位	92	34.78	神の意思を知ったり、吉凶を卜ったりする方法、技術について承りたし。	海村項目91へ。
7位	50	33.82	奉公人や日雇いの居りやすい家というのがありましたか。	海村項目から消える。
8位	94	30.88	氏神様や他の神仏に何といて拝むかを人に言ってきかせることは出来ませんか。	海村項目94「祈願の唱え言」
9位	35	29.41	義理固いと云うのは一族の気風によりますか、家風ですか、或は只一人一人の気質によりますか。	海村項目からは消える。
	90		妖怪、変化、狐狸その他色々の魔物を避ける手段というものがありましたか。	山村89項目「狐狸の怪、変化物」とカップリングで海村92へ。

順位	項目番号	不記載率(%)	山村調査項目における不記載率が低い項目	海村調査項目へのシフト
1位	80	0.00	山の神様はどんな所にあつて、何時どんな祭りをしますか。どんな神様だと云いますか。	海村項目78～80あたりに変形か？
2位	9	1.47	どうしても外から買わなければならぬものは何々ですか。	海村項目19で、逆にして「売り出した物」として
	20		村の人等が互に共同して作業するのはどんな場合ですか。	海村項目28にはほぼそのまま残る。
4位	10	2.94	買物には通例どこへ出ましたか。	海村項目20「買い物」
	13		明治以後に新たに村の人になった人がいますか。	海村項目17で外部者の定着について聞く。
	14		出稼には今までどの方面へ多く出ましたか。	海村項目23「出稼ぎ・遠方出漁」
	18		講にはどんな種類がありますか。	海村項目27「講・日待」
	62		花嫁はどの入口から家に入り、先ずどの部屋におちつきますか。	海村項目58
	63		葬式の時棺はどの口から出しますか。	上記62とともに海村項目58「家の出切り口」へ。
	95		雨乞はどういう風にしますか。風祭り、おてんき祭り、虫祈禱などもありますか。	海村項目95「共同祈願」へ。

「一番むづかしかった」問い

「漁の神・海の神」や79「船霊」へと変換されているし、山村項目番号9「外から買わなければならない物」は、物流の流れを逆転させる観点から19「売り出した物」との対応が推測される。このように部分的に補助線を張っていけば、山村調査で回答率の高かった項目は、海村においても相応の回答が得られることが期待され、調査項目として残されたのだろう。

それに対して、山村調査において不記載率が高かった10項目のうち3項目はボツとなり、調査項目としては採用されなかった。つまり「神信心の深い若者」（山村での不記載率39.7%）、「奉公人の居やすい家」（同33.82%）、「義理堅さ」（同29.41%）の3項目である。これらはたしかに質問しにくく回答も得られにくいことは想像に難くない。しかし、であるとすればより不記載率が高い項目が残された理由は何であろうか。つまり山村調査で不記載率が高かったのは「笑い」（山村での不記載率58.53%）、「仕合わせのよい人又は家」（同48.52%）、「村の公と私」（同42.64%）が上位の3項目であったが、これらはいずれも海村調査項目でもほぼそのまま残されている。つまり山村調査項目の海村調査項目への入れ替えは、不記載率が高いから回答を得るには効率的ではないという理由だけでおこなわれたわけではない、ということがこの段階でいえそうである⁽⁴⁾。と同時に、海村調査の際にこれらの調査項目がどの程度の回答率を得たのかという問題関心もさらに高まるのである。

3. 海村調査の採集手帖における不記載の実態

本節では、実際に採集手帖の百項目がどの程度記載され、どの項目に不記載が多かったか、その実態を明らかにする。採った方法は本稿に先立つ論文で山村調査の採集手帖を分析したのと同じ方法、すなわち百項目の各ページを確認してどのような記載がなされているかを記号化していくというもので、記載状況を前回同様に次のように四分類した。

- ◎…記載内容が見開き2ページ以上にわたるもの。
- …調査項目が印刷された右側ページだけに記述がおさまっているもの。
- △…「あり」「なし」「●項目参照」など、ごく簡略な情報しか書かれていないもの。
- ×…その項目に対する回答がなく何も書かれていないもの（いわゆる不記載項目）。

山村調査の採集手帖は毎年の項目の入れ替えや語句の修正などがあったため、三年間で調査項目がどのように改訂や増補、順序の入れ替えがおこなわれたのかを確認したうえで、最終年度の項目に置換する操作が必要であった。それに対して海村調査では、先にも触れたように採集手帖は昭和12年刊行のもの一種類で、二年あまりの調査期間中に調査項目の変更がなかったの

「一番むづかしかった」問い

確認することができた。その結果を示したのが【表4】である。

この表の縦軸には、民俗学研究所に保蔵されている採集手帖を番号順（したがって『海村生活の研究』の順序ではない）に採集手帖をならべた。リストアップされたのは32冊であるが、このうち25番は、倉田一郎による愛媛県越智郡宮窪村（大島）調査の第二冊目であるため⁽⁵⁾、実際に全ページの記載実態を確認した調査対象は31ヶ所ということになる。

いっぽうの横軸には調査地・調査者・調査年度などの欄とともに、調査項目の1番から100番までの項目番号を入れ、各採集手帖の各ページにどれくらいの記載内容が認められるかをページをめくりながら目視したうえで、その記載実態を上記の四種類の記号に分類しながら記していった。ただし前回と同様に、◎と○の違いは多分に感覚的なものであり、文字の大きさや余白の使用の仕方などで変わってくる可能性もあり、その差は厳密ではない。また△は、「——がありますか」という項目に対して、その有無や参照項目などを示す単純な語句だけしか記されておらず、厳密な意味で記載があったとはいえないのかもしれないが、少なくとも調査の時点でその話題をあげてみたことだけは確かだといえる。それに対して、×印をつけた不記載項目は調査者がその項目をスキップしたか、インフォーマントから明確な答えが返ってこなかったかであり、いずれにせよ◎○△とは明らかに差異のあった項目であるといえる。したがって表の最下部には×のページの実数とその割合も示した。

表を横に見ると、単一の採集手帖のなかにどれくらい不記載のページがあるかがわかるが、不記載0項目から77項目まで調査担当者によってかなり差がある。これには各調査担当者の調査のやり方や手帖の扱いなどが反映されており、それについては別に検討する必要があるがここではふれない。

それに対し、表を縦に読んだときの項目ごとの不記載の実数および割合は、ここでの主要関心に直結する。これについても項目によってはほとんどの調査担当者が話題にあげた項目とそうでない（質問をせず回答も得られなかった）項目との歴然とした差が明らかとなった。調査担当者をもっとも記載しなかった項目は、前回の山村調査の採集手帖の検討においても首位をしめた「笑い」（項目40）が31冊中21冊を数え第一位であった。不記載率の高い順、または低い順のランキング表を次の【表5】にまとめた。

この表によると、不記載率の高い割合は「笑い」に続いて「先祖祭り」（項目55）、宮座（項目76）となっており、前回第2位だった「仕合わせな家」（項目100）はその次の第4位にランクインしている。前回不記載率の高かった項目としては他には「村の公と私」（項目32、前回3位・今回7位）、「祈願の唱え言」（項目94、前回8位・今回7位）があげられる。いくつかの項目は、山村と海村に共通して不記載率が高いことが確認できる。

いっぽうの不記載率の低い項目、つまりほとんどの調査担当者が記載している項目は、「売り出した物」（項目19）、「仕事の

「一番むづかしかった」問い

【表5】海村調査採集手帖における不記載率ランキング

不記載率の高い項目				
項目番号	項目名	不記載実数	不記載率	
40	笑い	21	67.7%	前回▼1位
55	先祖祭り	16	51.6%	
76	宮座	15	48.4%	
100	仕合わせな家	15	48.4%	前回▼2位
77	神に祀られた人	14	45.2%	
99	死期の予知	13	41.9%	
2	功労者	12	38.7%	
32	村の公と私	12	38.7%	前回▼3位
82	祭前の慎み	12	38.7%	
94	祈願の唱え言	12	38.7%	前回▼8位
不記載率の低い項目				
項目番号	項目名	不記載実数	不記載率	
19	売り出した物	1	3.2%	前回△2位
59	仕事の服装	1	3.2%	
65	大漁祝	1	3.2%	
71	正月祝	1	3.2%	
84	船上禁忌・沖言葉	1	3.2%	
1	村の起り	2	6.5%	
7	古い漁法	2	6.5%	
10	漁撈仲間の役割	2	6.5%	
25	村内の組	2	6.5%	
28	ユイ・モヤイ	2	6.5%	前回△2位
42	若者組・宿	2	6.5%	
44	嫁入り・初婚入り	2	6.5%	
57	間取り・イロリ	2	6.5%	
60	晴の服装	2	6.5%	
78	漁の神・海の神	2	6.5%	前回△1位
79	船霊	2	6.5%	前回△1位
81	流れ仏	2	6.5%	

服装」(項目59)、「大漁祝」(項目65)、「正月祝」(項目71)、「船上禁忌、沖言葉」(項目84)の五項目で同率1位(不記載の手帖は1冊のみ)という結果である。このうち「売り出した物」は山村調査でも2位の高回答率をマークしていた。

不記載率が高い項目、低い項目のいずれも、【表2】とつき合わせてみるとわかるとおり、海村に固有の調査項目として今回新規に百項目入りした項目もないではないが、大半は何らかの形で前回も百項目の中に入っていたものであり、その際は不記載率の高低という観点ではとりわけ顕著ではなかったものが多い。これを山村と海村の環境条件をはじめとしたさまざまな文化的個性のちがいとして考えられるかもしれないが、それを深追いする材料をここでは持ち合わせていない。むしろ、山村でも海村でも不記載率の上位にあがる「笑い」、「仕合わせ」、「公と私」、あるいは不記載率の低さで顕著であった「売り出した物」、「ユイ、モヤイ」、「海の神、漁の神(山村では山の神)」などはさしあたり着目しておいてよいだろう。

上位にランキングした項目がその順位を微妙に変えるなかで、「笑い」の項目だけは山村海村どちらでも不記載率1位の位置を変えていない。本稿のタイトル通り、さすが瀬川清子が「一番むづかしかった」問いとして太鼓判を押しただけのことはある。筆者のそもそもの関心が笑いのフィールドワークに関する問題意識であることから、この調査項目としての「笑い」の不記載実態というのは特筆すべきことであるので、本節の最後にその

「一番むづかしかった」問い

ことについてふれる。

海村調査採集手帖の項目40は、山村の採集手帖項目37からの引き継ぎであることは表2にも示されていたが、項目タイトルだけでなく調査内容を示すワーディングを確認すると、微妙に手が加えられている。

山村項目37 笑わない人がいますか。

○特によく笑う癖のある人はありませんか。

▽笑いによって人から尊敬されたとか、人を打ちまかした等と云う実例はないか。

▽自分では笑わぬが他人をよく笑わせると云う人はないか。

海村項目40 自分は少しも笑わなくても、よく人を笑わす人がいますか。

よく笑う人を、村人は何と見ているか。

笑いによって尊敬され、或いは人を打負かしたというような話はないか。

山村調査における質問項目だけでは調査がむづかしかったという反省があったのか、山村採集手帖では調査の際の注意事項として記された▽項目である「自分では笑わぬが他人をよく笑わせると云う人はないか」を主質問にもってきて、別の注意事

項である笑いによる尊敬や他人への攻撃という機能も質問事項に組み入れている。総じて山村調査のときには笑うという感情表現そのものを問うことが強調されていたような問い立てが、海村調査では「笑わせる」という使役性に重きがおかれ、また村人の笑いに対する評価をより強調する形で質問項目が構成されているように、力点の変更を読み取ることができる。

不記載率の数値だけみると、山村調査では58.53%だった「笑い」の項目は、海村調査では67.7%に上昇しており、調査担当者もしくは回答者によって敬遠される項目である度合いを強めているようにもみえる。ただし記載内容としてはより詳しくなっている側面もみられるので、記載のあった10冊の採集手帖よりその記述を拾ってみる。

《5番手帖 福島県石城郡豊間村》(山口彌一郎)

戯談をよく云って笑わせる人があるが村の人はあまりほめない。

ある家の人々は皆笑顔がよいと云われる家があって、尊敬される。

オーフ ムツとして人に会っても声をかけぬ人。

《11番手帖 新潟県西蒲原郡間瀬村》(橋浦泰雄)

一、かかる人の記憶は無い。

《12番手帖 新潟県佐渡郡内海府村》(倉田一郎)

高千の本間弥之吉は、ムツリとしているが皆を笑わす。こ

「一番むづかしかった」問い

んな人はよろこばれる。(北小浦)

〔他は、項目39の大食についての話〕

《15番手帖 静岡県賀茂郡南崎村》(瀬川清子)

山家の者達のとった猪を下流の者が射とめたからととって来た男があったが、その男はおもしろい男だったが、他には平山京太郎氏(90才)は毎日笑わないとくらされぬと云っている。

《19番手帖 和歌山県和歌山市雑賀崎、西牟婁郡串本町、東牟婁郡大島村檜野、同郡太地町》(橋浦泰雄)

西牟婁郡串本町

永くアメリカに出稼ぎして金を貯めて帰っている老人がある。珍奇なものの蒐集家で、ステッキ兼用の大パイプやらその他時計でも帽子でも靴でも手廻りのものなど何から何迄珍奇づくめにあつめている。又隙にまかせて近村などでも祭礼の時とか何か賑かな事があると気軽に出發して行き、衆人環視の中でその珍奇な種々をひねり廻して得意になっている。口先も軽くヒョウキンな洒落やら皮肉やらを云って他人を笑わせ、殊に他人の弱点を深酷〔ママ〕に曝露して痛快がっているが、ヒョウキンな表現だから喧嘩になどはしない。大して尊敬もされていないが、さりとして憎まれたり馬鹿にはされていない。何処か偉いようでもあるが得体の知れぬ奇人だとして一般に思われている。面白い人物、こんな人物も時には調法だとも思われている。

(76)

《21番手帖 鳥根県簸川郡北浜村（附・那賀郡川波村波子）》（瀬川清子）

小津の仁右エ門は船子であったものか面白い話を残している。

1. ハナノ木を売った話

盆で川に流したハナノキを拾って、もう一度盆をさせて儲けようと思って、何か変化のあったのをよいことにして、「も一度盆せすやあらぬ」といいふらして一もうけした。

2. 狐がガイに（ひどく）居た頃、狐を集めていうには、「お前らは七変化しかしまいが、私は八変化してる。ききたかったら何日ここに来い」といって一網打尽して狐をとった。

3. 賽銭に糸をつけて得る。

4. 金の鳥■

5. 馬が金のくそこいだ。

《22番手帖 鳥根県穩地郡都万村》（大島正隆）

以前村に居た彦左という男は幼児ひどいホーソーをしたため、ユヅの様な顔をして居たが、話上手でよく人を笑わせ、都万の方まで頼まれて行き、大笑いさせて帰りには背負いきれぬ程米をもらってきた。

廻船のセンドーをして下関に行ったところ、あちらの人驚いて、センドーさんの様にひどいホーソー患った人は見たことがないさぞ大変だったろうという。答えて曰く、私の国にはもっとひどいのが居る。そういうのは皆患って死にましたと。彼の逸話は一口噺の様になって伝わっている。

「一番むづかしかった」問い

このオヤジの孫は浪花節がうまく、西郷あたりへ出て大入りをとったりする。何かやはり血統をいくのかもしれん。(津戸)《24番手帖 愛媛県越智郡宮窪村(大島)》(倉田一郎)

よく笑う人がある。

笑っておらぬ時にも笑うのがある。

そういう人を「あの人はエガオのええ」という。

まじめな顔をしていて人をふと抱腹絶倒させるほど笑わせる人がある。そういう人を「何々さんはおもしろい人だ」という。

《29番手帖 高知県幡多郡沖ノ島村・鶴来島・弘瀬・母島》(牧田茂)

⑤〔鶴来島の略号〕口弁の腹のない人というものが一浦にはあるもので、そういう人は根性は悪くない。腹を立ててもそういう人がくると笑わすよっていつている様なものである。

《32番手帖 沖縄県宮古郡平良町池間》(森田勇勝)

あり。

このような記載内容のほうから逆にこの調査項目の意図を類推するに、たとえば19番手帖のように村にいた変わり者の記述から、21番手帖のようなある種の典型的な話形の抽出まで、調査担当者の調査項目に対する理解と解釈にはかなりの幅があったといえる⁽⁶⁾。その幅は山村調査のときから継続して海村調査の項目としても設定されており、その幅は意図的に温存された

のではないかとすら思えてくる。項目40の記述がある種のあいまいさを含み込んでいるがゆえに、一問一答のような形で特定の回答を得るための調査項目とは別のねらいがあったのではないかとと思われる。

4. 考察と展望

前節までで海村調査の採集手帖における不記載の実態がおおよそ明らかになった。山村調査に引き続き不記載率でトップとなった「笑い」の項目について、どのような内容が採集されたか、その記述の読み起こしもおこなった。

当初三ヶ年の計画ではじめられた海村調査は、ちょうど日中戦争の開戦と同年の1937（昭和12）年に開始され、その影響を受けて当初計画を変更せざるを得なかった。それだけでなく、その成果の刊行もアジア太平洋戦争の終結を待って1949年まで引き延ばされた。活動内容としても調査担当者が変更されたり⁽⁷⁾、当初「離島及び沿海諸村」を対象としていたものの規模を縮小したため、離島を対象とした共同調査が戦後に持ち越されるなど、大きな変更がみられた。離島調査は終戦後、仕切り直しがおこなわれ、『海村生活の研究』が刊行された後の1950年から三ヶ年計画で実施され、その成果である『離島生活の研究』の刊行は1966年であった。

したがって、『山村生活の研究』、『海村生活の研究』、『離島生

「一番むづかしかった」問い

活の研究』はふつう三部作のように見なされるかもしれないが、かなりの時間的間隔があいている。それだけでなく、それぞれのもととなった現地調査も、継続された部分もあるが最後の離島調査は前二者とはかなり色合いの異なったものになっている。その一つは二節でも述べたように、項目ごとに見開きページに調査内容を記入していくスタイルの採集手帖ではなく、自由記述方式が採られていることである。もっともこの自由記述のスタイルは、海村調査の採集手帖では移行的な中間形態として100の項目に対し2ページずつ割り当てられた見開きページのあとに70ページほどの余白ページが用意された。そして今ひとつは、前二者の調査項目数が100に限定されていたのに対し、離島では14部門176項目へ、大幅に膨れ上がっている。これらの点を糸口に、いくつかの付言的考察を書き加えて今後の展望としたい。

まず自由記述方式についてであるが、海村調査がいったん中断されて戦後に仕切り直しとなった際、沿岸地域と離島を合わせて対象とするような調査項目の作成を検討した桜田勝徳は、次のように述べている。「あの手帳は野帳としても工合がわるいし、報告書作成の共同様式としても都合が良いとは決して云えない。それでは……その何れを先ず作ったら良いかが問題になるが、とに角二兎を追うやり方を捨てて、共同の調査項目と共同の報告様式とを二つ別々に作ってみるのが、調査事業を推進する上に適切だと考えられる」[桜田 1949 : 33]。

「二兎を追う」とは、桜田の言葉では「調査野帳」と「報告書」

と表現されているが、このふたつの用途が山村・海村の採集手帖にはあったものの、どっちつかずの状態で使い勝手が悪かったという指摘である。調査野帳としての用途は、調査進行中に2ページずつに記述の分量が定められたかのようなページに聞き書き内容を分類しながら書き込んでいくのは至難の業であり、桜田自身はほぼそのような使い方はしなかったと書かれている。しかし一方の報告書用としても項目ごとに断片化して記録することとなり、一続きの長い情報を書き込むには不便だと指摘されている。たとえば桜田自身は、年中行事について別冊の報告書を作る必要があったという。

そこで桜田が提案したのは、「その内調査項目の方は、一枚の紙に項目を羅列する様にし、出来れば調査上の注意事項とか参考になるものか何か掲げておく。……次に報告様式の方は、調査地の特殊事情に応じて調査者の適宜な方法に委ねるべき所が多いと思うから、あまり立ち入った規準の設定は避けねばならぬ」[桜田 1949 : 33] という形式であった。

採集手帖に白紙ページが取り入れられた顛末については、かなり時間がたった後の座談会でもふれられている。「『離島調査』にはどうして白紙の手帳を用いたのですか。……。[桜田勝徳は]要項と手帳を別にしろ、ということを盛んに言っているわけですね。……。山村と海村の場合、一枚に一項目ずつ質問が書いてありますから、たくさん聞いたことでもとにかく一、二ページにまとめなくてはならないというのが不便だというわけですね。

「一番むづかしかった」問い

……瀬川さんが「海村調査」をなさった時に、手帳の末尾の白紙部分にたくさん書くんですね。そうすると、自分でもそれがどこの項目だかわからなくなると。自分の保存用に写して副本をとった際に、よけいにそれを強く感じたというんですね。このことは瀬川さん以外でも普通に皆さんよく話していらっしゃいましたよ」[田中ほか 1997：111]。また別の箇所では、「『離島採集手帳』も一ページに一項目を書くのではなくて白紙にしておいて、必要なことは何ページにわたっても詳しく書けるようにする、総合的に記録するのだと手帳を改めました」[田中ほか 1997：112]とも述べられている。

ここにみられるのは、調査項目間、ならびに調査項目と民俗誌記述の情報量の不整合である。山村・海村の採集手帖の形式では、100の問題意識に対して均等に2ページずつの記述スペースが割り当てられ、それを越える量の情報に関しては、採集手帖のなかで次のページにまではみ出して書き込まれたり、別のページを用いたりして工夫されたものが少なからずある。このような変則的記載が生じたことから、情報量の多寡が実際の使用者の中でも問題になり、その記述量の不均一さゆえに2ページ見開きの採集手帖は使い勝手が悪いという反省点となっていた。さらに、海村の採集手帖のように一応100の項目について2ページずつ割り付け、書き足らなかったら巻末の70ページ分の白紙に書くという折衷形式をとると、「自分でもそれがどこの項目だかわからなくなる」という混乱が生じることとなったため、

離島の採集手帖のように自由記述式になったというわけである。このような点を經由して考えると、白紙ページの自由記述は、本稿で検討したような項目ごとの情報量の大きな差を反映した結果であったとも言えよう。2ページごとに割り付けられた調査項目の余白からあふれるほどの情報に恵まれる項目もあれば、まったく情報が得られないで不記載のまま提出された項目もあったことがあらためて確認できる。

もともと、項目ごとの記述がなされていないからといって、離島調査において調査項目の放棄がなされたわけではなく、むしろ逆に、調査項目は100だったものが14部門176項目へと増加し、むしろ充実している。自由記述であるから、調査にいたらなかった、あるいはそもそも調査する関心が起こらなかった項目については、確かめる術はない⁽⁸⁾。しかし傾向として、白紙ページに自由に記述していく方式と、調査項目をどんどん細分化して設定するという逆向きの動きがその後の離島調査で起こっており、海村調査はその移行段階であったとも考えられる。そこで見られたのは、いわば「総合化」と「細分化」という二つの傾向と言い換えられるかもしれない。

この「総合化」と「細分化」という両極の傾向は、本稿で検討してきた記載実態のばらつきの観点からどのように考えることができるだろうか。不記載そのものについては、本稿に先立つ拙稿で、調査担当者がどのように質問すればよいかとまどった、あるいは回答者が説明に窮した、といった調査の現場での

「一番むづかしかった」問い

問題として考察した [川田 2025]。しかしその手前に、そもそも調査項目の性質のちがいとして考えるべき課題が存在しているようにも思われる。

総合化という表現は、当時、調査に参加した民俗学者自身によって言語化されているとおり、明確に意識されていたことがわかる。先の引用にも「総合的に記録する」という発言がみられるし、「民俗の伝承は村の暮らしと有機的に連関しているんです。だから、村の全体を総合的に把握しなけりゃいけないというのが山口麻太郎さんのご意見でした」 [田中ほか 1997 : 112] という竹田旦の発言も確認できる。要するに、項目の細分化とは調査で得られた情報の「断片化」を招き込むおそれがあり、それぞれの断片がバラバラになってしまわないような逆ベクトルとして常に総合化の工夫が試みられていたのである。民俗調査によって対象村落の全体を描き出すために、ひとつひとつの断片となるのが各調査項目であり、それを仮にモザイク型項目と呼んでおこう。離島調査の場合、14部門176項目のモザイクに細分化＝断片化された地域の情報を総合化するのが自由記述による民俗誌であったと考えることができる。

それでは、山村・海村調査にあっては何が総合化のベクトルとなり得るだろうか。100という項目数は、離島調査に比べると断片化がさほど進行しない程度の項目数だともいえるが、それでも後の民俗調査の原形を作った共同調査のプロトタイプとして、村制や族制、衣食住や生業、儀礼や信仰にいたる民俗の細

目表をそれとなく読み取ることもできそうである。では対象となった山村や海村は、それらの断片を組み合わせるとその全体像が姿をあらわすかということと必ずしもそうとはいえないだろう。そのいっぽうで、「笑い」や「仕合わせな家」といった項目は、対象村落の全体のうちのどの部分を担っているのかとあらためて考えてみると実は判然としない。このような項目は、部分的な情報を分担しているというよりも、その質問を発することによって土地柄や人となりを全般的に浮かび上がらせるようなエピソードが語られ、その語りを重ねていくことによって全体が臍気ながらつかみとれるという仕掛けであるようにも解せられる。つまり、バラバラに切り分けられたピースを組み合わせて一枚の画像を完成させるジグソーパズルではなく、シアン・マゼンダ・イエローの各層が重ね合わされることによって一枚のカラー画像ができあがるイメージであり、モザイク型項目に対して、レイヤー型項目とでも呼びうるものである。

山村および海村の百項目調査にあっては、このようなレイヤー型項目は全体性への志向を担っており、村とはこのようなものであり、そこでの人の生き方というのはこのようなものであった、といった総合化も果たし得たと考えれば、村落生活を部分部分に切り分けて回答をえるようなモザイク型項目による細分化とのバランスがちょうど取れていたとも受け取れる。しかし離島調査においては、項目が1.7倍にさらに細分化されたため、さらなる総合化のために自由記述の民俗誌部分が必然的に求め

「一番むづかしかった」問い

られたのであった。モザイク型項目は、民俗事象のある部分を特定して記述・説明するには効率的であり、限りなく精緻化していくことも可能だからである。山村・海村の百項目調査においては、そのような全体性への志向が項目自体の中に埋め込まれたレイヤー型項目によって、ある程度カバーされていたと考えるならば、「海村生活の研究」を語る」と題する座談会での、次のような瀬川清子と柳田国男の発言も示唆的に読み取れる。

「瀬川 私は唯歩いただけで……(笑声)。苦心というより女でしたせいか、何しろ学者でなくて、素人ということをしみじみ感じました。採集から帰って手帖を整理しながら、村人の人生というものの方が印象が深く……これはどうも日本の女が学問にむかない点かもしれませんが、人生の方に深くふれて、少しばかりはがゆいと思って居ります。

柳田 人生観の裏付けがなくて民俗採集をしてみても何ものならない。北三河の木地屋のおばあさん等にきいて来たことが、現実の民俗的現象というわけで、総合的な人生をみるのがよいと思うね。例えば「きもの」などは全体概括しようとして、個性のないのは欠点ではないかと私などは考えている。それよりも一人の人間を中において全体みた方がよいと思うが……。アメリカで自伝体というのがありますが、インディアンのおばあさんのような平凡な人間の自伝を書くのだが、それについて人生の問題すべてが現れてく

と思う。その意味で、細かく個々の問題に切ってしまう方がよいのではないかと思うが、どうだろう。いま瀬川さんが後悔した所が、かえって値打があると思うね。そういうことを話してくれる人はもう少なくなったね。」[柳田ほか 1949：27]

ある種の調査項目は、「細かく個々の問題に切って」しまうのではなく、「一人の人間を中において」「総合的な人生をみる」ように、あるいは「人生観の裏付けがなくて」は受け止めきれないような問いに根ざしており、それは一問一答のような形ではなく、問い方を少しずつ変えて（それこそ「笑い」や「仕合わせ」といったふうに）重ね塗りしていくような描き方によって、「人生の問題すべてが現れてくる」というしくみである。「重ね塗り」というのは柳田自身の言葉としてはあらわれないが、個々の問題に切ったものを再びつなぎ合わせるといった再構成の方法をとらないとしたら、「笑い」の層・「仕合わせ」の層……といったいくつもの層を重ね合わせて描き出していくレイヤー型がイメージしやすい。

ただし、柳田が「そういうことを話してくれる人はもう少なくなった」と言っているように、レイヤー型項目は、不記載項目になりやすい。本稿でとりあげた不記載率の違いの問題の基底部には、レイヤー型とモザイク型という調査項目の性格の違いがあったということもできるだろう。

「一番むづかしかった」問い

その後、調査項目といえばモザイク型が主流になっていく。とくに共同調査が分業体制にもとづく効率性を追求する活動になっていくと、モザイク型の方がはるかに合理的だからだ。そしてレイヤー型項目は民俗調査の項目として、姿を消してゆく⁽⁹⁾。実際、『日本民俗学大系』13巻にしても、『民俗調査ハンドブック』にしても、その後で作成された体系的な民俗調査項目には「笑い」の項目は見いだされなくなる。あるいはレイヤー型だった項目は、モザイク型に変質して、調査項目表を構成するようになったのかもしれないが、その子細を検討することは他日を期すよりほかないのである。

【注】

- (1) ただし「仲の良い村、悪い村」は昭和11年度調査で47番目、「褒められる若者」は38番目、「村の公と私」は28番目の項目であり、筆者の前掲論文〔川田 2025〕では不記載率はそれぞれ22.05%、21.05%、42.64%であった。「村の公と私」はたしかに不記載率が高い（第3位）といえるが、20%台の「仲の良い村、悪い村」や「褒められる若者」は実際には不記載はさほど多いわけではなく、それよりもはるかに37番目「笑わない人はありますか」（58.53%）や100番目「仕合わせのよい人又は家」（48.52%）の不記載率が圧倒的に高いことがわかった。
- (2) 本稿における文献の引用については、読みやすさを勘案してできるだけ現代仮名遣いや当用漢字に変換している。ただし既出の「むづかしかった」だけは、本論文タイトルとしても使用している

(88)

関係で、「むづかしかった」のままとした。

- (3) ただし昭和13年度17番は『海村生活の研究』に「秋田県南秋田郡北浦町・戸賀町」という調査地名が記されているが、この採集手帖は民俗学研究所の保蔵資料の中にはみつからなかったので空欄としてある。
- (4) 逆に、山村調査での不記載率の高低にかかわらず、海村調査の項目として引き継がれなかった項目を列挙しておく。7「焼畑作り」、8「山小屋の作法」、16「永く外にいて帰った人」、17「村の自治組織の今と昔」、19「女の講」、22「大災害の時の援助」、23「共有の山河の利用」、24「共有財産」、25「猟の獲物の分配」、26「村のつきあい」、27「村ハチブ」、33「同族結合の様式」、35「義理固い家」、38「褒められる男女」、40「子供組」、42「氏子入り」、45「女の仕事」、47「仲の良い村、悪い村」、48「他村からの手伝い」、49「日雇、奉公人、名子」、50「奉公人の居易い家」、53「酒宴をする日」、54「村寄り合いの席、費用」、56「土産の贈答」、69「同族神」、72「氏神のきらうもの」、82「信心深い若い人」、83「土地で信仰される神仏」、85「不入山、クセ山」、88「怪しい響」、97「通り神」。全31項目にのほり、約三分の一は海村調査にそのまま引き継がれなかったことになる。同じ百項目調査という形式に惑わされがちであるが、調査内容はかなり異なっていたという点は見逃してはならないと考える。
- (5) 第一冊目には百項目についてまんべんなく記載され、24番手帖には不記載項目は0項目であり、さらに後半部分の72ページ分の白紙ページもほぼ記載で埋め尽くされている。それでも余白が足りなかったのか、25番手帖には、24番手帖の補足として、「塩田の話」、「船大工の話」、「雑話」といったトピックを定めて特定の自由記述をしている。

「一番むづかしかった」問い

(6) もちろん、「笑いによって尊敬され、或いは人を打負かしたというような話はないか」という調査項目の補足説明からは、笑いに含まれるある種の政治性や攻撃性などをねらいのひとつとして持っていた可能性もあったといえるかもしれない。他人と口論になった場合、理屈で論破してしまうのではなく、その場を笑いで和ませると同時に、笑いという形の同意を取りつけるやり方でこちらの主張を飲み込ませるといった交渉テクニックは、対人関係においてもある種の効力を発揮するからである。しかし実際の項目40の記載内容をみると、笑いによってそのような政治力が効果的に発揮される事例を限定的に浮かび上がらせるものではないように読める。

(7) 本稿の調査対象となった32冊の採集手帖のうち、約半数の14冊が瀬川清子によるものであることに端的にあらわれている。この事情について、「海村調査」・「離島調査」を語る」と題する座談会では、次のような発言がある。「昭和十二年の七月七日到北京郊外の盧溝橋で、日本と中国との本格的な戦争が始まり、たくさんのメンバーに召集令状がきました。したがって、『海村生活の研究』の巻末の年次別調査地一覧表では、第二年目以降はほとんど全部を瀬川清子さんお一人でなさっているほどです。というのは、それだけ男性がいなくなってしまったのですね。……瀬川さんから聞いたところ、「海村調査」の場合、やはり他の方が行かれなくなると瀬川さんの所にまわってきて、「お前が行け」と言われるので、瀬川さんは、「休みはもう本当にこのことだけでした」とおっしゃっていましたね」[田中ほか 1997 : 102-103]。

(8) 詳細な検討を経ない印象としては、離島の採集手帖では「笑い」や「仕合わせのよい人または家」といった情報の記載は見られず、また176にふえた調査項目からも姿を消している。離島調査にのこ

(90)

された176項目は、それまでの山村調査や海村調査での回答率からも、現場で質問して一定以上の回答が得られることが期待される項目が多かったと考えられる。

- (9) 柳田が「自伝体」として引き合いに出している方向性は、いわゆるライフストーリー研究として顧慮されているし、近年ではオートエスノグラフィーについても関心が寄せられるなどしているので、総体としてのひとの人生を描くことが完全に放棄されてしまったわけでもないし、そういった方法が必ずしも「姿を消す」一方ではなかったのかもしれない。ただしそれらの大半は、項目調査批判の延長線上にある議論から出てくることが多いように感じられる。百項目調査のように、モザイク型とレイヤー型の両方の項目が複合的に組み合わせることによって一連の項目調査が構成されるというのは、やはり稀有なりサーチ・デザインであったと言えるのではないかと考える。

【参考文献】

- 小野博史 2002「フィールドワークと『北小浦民俗誌』」福田アジオ
(編)『北小浦の民俗—柳田国男の世界を歩く—』吉川弘文館、pp.
281-311
- 川田牧人 2025「お答えを差し控えさせていただきます—山村調査
「採集手帖」における不記載項目—」『民俗学研究所紀要』第49集、
pp. 1 (202)~33 (170)
- 桜田勝徳 1949「離島沿海僻村の共同調査項目作成に当って」『民間伝
承』13-8、pp. 32-35
- 篠原徹 1990「世に遠い一つの小浦—『北小浦民俗誌』の解剖学—」
『国立歴史民俗博物館研究報告』27、pp. 47-87

「一番むづかしかった」問い

- 成城大学民俗学研究所（編）1990『昭和期山村の民俗変化』名著出版
成城大学民俗学研究所（編）1986・1987・1988『山村生活五〇年 その文化変化の研究』（昭和五九年度調査報告、昭和六〇年度調査報告、昭和六一年度調査報告）成城大学民俗学研究所
- 田中宣一 1985 「「山村調査」の意義」『成城文芸』109号、pp. 26-81
- 田中宣一 2002 「「海村調査」「離島調査」とその成果の活用」田中・小島（編）2002：9-24
- 田中宣一 2017 「「山村調査」追跡調査の追跡」『民俗学研究所紀要』41、pp. 50-81
- 田中宣一ほか 1997 「座談会「海村調査」・「離島調査」を語る」『民俗学研究所紀要』21、pp. 97-138
- 田中宣一・小島孝夫（編）2002『海と島のくらし—沿岸諸地域の文化変容—』雄山閣
- 中野泰 2001 「「倉田手帖」と『北小浦民俗誌』—「民俗語彙」の取捨選択から統合へ—」福田アジオ（編）『柳田国男の世界—北小浦民俗誌を読む—』吉川弘文館、pp. 318-355
- 比嘉春潮・大間知篤三・柳田国男・守随一（編）1984『山村海村民俗の研究』名著出版
- 福田アジオ 1984「解説—「山村調査」と「海村調査」—」『山村海村民俗の研究』（比嘉・大間知・柳田・守随（編）1984）
- 柳田国男（編）1949『海村生活の研究』日本民俗学会
- 柳田国男ほか 1949 「「海村生活の研究」を語る」『民間伝承』13-7、pp. 24-32